

第3章

ひととまちとのいい関係

● 緑区／都筑センター 老いを ささぐえる人々

地域で老いを迎えたい

二〇一〇年頃には五人に一人が高齢者となり、本格的な高齢化社会を迎える。そこで問題になるのは、誰がお年寄りを支えるかということ。老いのかたちも十人十色。元気に活動を続ける人もいるが、中には寝たきり、痴呆症など、他者の介護を必要とする人もいる。

だが現在、ひとり暮らしのお年寄りや高齢夫婦のみの世帯が増え、また、家庭での高齢者の介護機能も低下の一途をたどっており、いま「地域での支え合い」の必要性が高まっている。

一方、自分が寝たきりになったとき、どのような介護を望むかという市民調査では、「家族の介護と行政のサービスのより自宅で生活する」を筆頭に、自宅介護を求める

声が大方を占めた(平成四年「横浜市高齢化社会基礎調査」)。

多くの市民は、自宅で、地域で、老いをまっとうしたいと願っているのだ。そこで横浜市中では、家庭で介護を必要とするお年寄りにホームヘルパーの派遣やデイサービス、ショートステイ事業など、さまざまな福祉サービスを行っているが、一人ひとりの心の支えには、地域の人たちのやさしい思いやりが不可欠である。

しかし現実には、「市民生活行動調査」でも、日頃から「高齢者・障害者関係のボランティア」活動を行っている、と答えた市民は二・六%とごくわずか。高齢者や障



“さわらび会”の活動は、今後のボランティア活動の広がり、定着のひとつの方向を示している (左)

老人給食会では、お年寄りの方々の身になったメニューとなごやかな場を提供している (下)



害者のために自分の時間を割こうという人はまだまだ少ないようだ。

こんな横浜の現状について、「ボランティアをやってみたいと考えている人は案外多いと思うんですよ。しかし、それを始めるきっかけがないから、実際に活動している人が少ないんですね」と語るのは、緑区にある都筑センター(福横浜市社会福祉協

議会が運営)の小島陽子館長。

環境事業局北部工場と隣りあう「都筑ふれあいの丘」は、さまざまな活動の場を持つ地区センターと、老人福祉センターとが併設されているところ。小島館長は、この環境を利用して、活動へのきっかけづくりを図っている。

センターでは年一回、保健婦さんを講師

に、ボランティア養成講座を開設。高齢者介護の実際を学ぶ「老人介護講座」と、福祉全般について学ぶ「福祉入門講座」の二本立てでボランティアを育成中である。参加者は平均三〇〜五〇名、ときには七〇名になることもある。

助け合いの心をむくむ

この老人介護講座修了生の活動の場が「さわらび会」。昭和六十一年発足のこの会には、修了生だけでなく口コミで集まった人もいて、現在メンバーは約三〇名。いずれも六十歳以上の熟年パワーあふれる市民たちである。

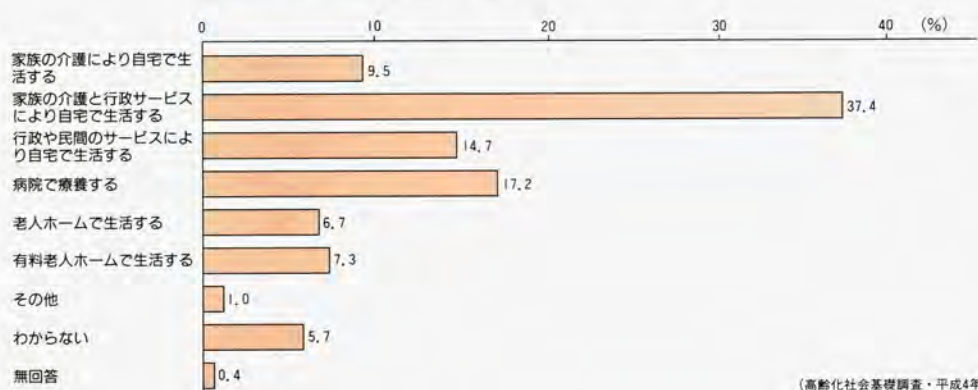
会の活動は、センター近くの都田地区に住みながら、足の便が悪いため利用できなかったお年寄りへの送迎サービスからスタート。現在ではこのほかに、寝たきりのお年寄りに入浴を楽しんでもらうデイサービス活動も行っている。

ある痴呆症のお年寄りは、いつもボランティアの人たちの呼びかけに、まったく反応を示さなかった。ある日の入浴サービスのおりも、「おじいちゃん気持ちいい？」「さっぱりしたでしょう」というボランティアの呼びかけに何も応えない。そこで、ボランティアの一人が思わず「気持ちよかったら何か反応してくれればいいのねえ」とつぶやいた。その小さな声に、今まで無反応だったおじいさん、触れていた手にぎゅっと力をこめて応えたのである。思いがけない反応に、みんなが喜びの声を

あげた。それは、ボランティア活動をしていなければ味わえない、素晴らしい一瞬だった。いまこのお年寄りは少しずつ回復して、デイサービスの日を楽しみにしているという。

また都筑地区センターでは、月二回の「老人給食会」の活動も行われている。こちらは四十代から五十代の主婦が中心。三

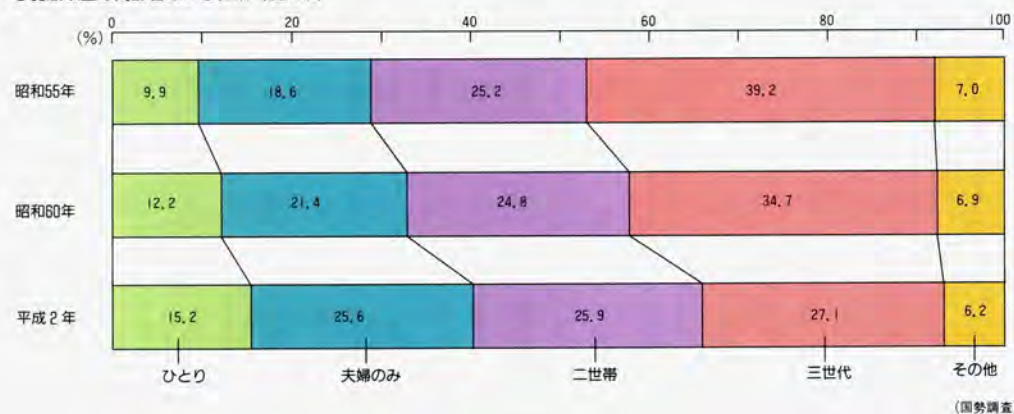
●高齢期に体が不自由になった時の介護方法



〇名ほどのボランティアが、お年寄りのために昼食をつくり、一緒に食事をして交流を深めている。

食事のメニューはボランティアたちが相談してきめる。食中毒の心配があるので肉、焼き魚などが中心だが、主婦の知恵によって、お年寄りの口にあうような、家庭的で消化のよいメニューが豊富に考え出されて

●65歳以上の高齢者のいる世帯 (横浜市)



いる。

「おいしい食事をいただいて、皆さんとおしゃべりできるのがなによりです」とお年寄りの評判も上々。近くの農家がお米や野菜を差し入れてくれることもあり、支え合いの心は少しずつ地域にも浸透しているようだ。

「毎回、お年寄りの方たちにおいしいと喜んでいただけるので、やりがいを感じます。やがては私たちも老人。身体が自由に動くうちに、人のためにお役に立ちたいんです」と語るのは「老人給食会」副代表の川村淳子さん。川村さんたちのようなボランティアの存在が、住み慣れたところで心安らかに老いたいと願う多くの市民にとって、心強いものであるのは間違いない。

今後、高齢化が急速に進むことが予想される横浜市では、行政の在宅支援のための施策はまだ十分とはいえず、よりいっそうの充実が必要とされている。それとともに、ボランティア精神あふれる人々の力を掘り起こし、その力を借り、またその力が十分発揮できるようにあと押しをしていくことも大きな課題である。

思いやりあふれるまちの実現には、老いを個人の問題ととらえずに、地域ぐるみで支えていこうとする市民の互助パワーがなにより肝要といえそう。ボランティアの輪の広がりは、確実に高齢化社会の貌を変えてゆくことだろう。

二十一世紀まで、あとわずか。

第3章

ひととまちとのいい関係

共に生きる まちをめざして

●中区／オリブ工房

一杯のコーヒーを交流の窓口

すっかり道順を覚えてもらったのに、バスからおりるとすぐ立ち往生。しかたがないので、通りかかった子ども連れのお母さんにきく。「あのお、オリブ工房はどこでしょう」「ああ、その公園の隣ですよ」。そうか、オリブはここではよく知られた存在なんだ。

「オリブ工房」（社会福祉法人聖坂学園）は、巨大ショッピングセンター「マイカル本牧」の隣に位置する、知的障害をもつ十八歳以上の人たちのための通所更生施設である。

中区東部のこの地区は、昭和五十七年までは米軍の接収地だったところ。横浜スタジアム三十四個分の広大な敷地に、いま横浜市は新しいまちづくりを進めている。オ

リーブ工房も、瀟洒な住宅街のまん中で、横浜市中図書館、本牧地区センターと一体となった地域に開かれた障害者施設として、新しいまちにふさわしいユニークな試みを展開中なのである。

福祉施設をもっと地域に開き、市民の積極的な助力を得て、より充実した福祉サービスを提供しようと、いま福祉行政のあり方が変わりつつある。この考え方にもとづいてオープンしたオリブ工房には、現在、男性二十九人、女性二十二人の計五〇人が市内各区から通所している。多くは家族の付き添いがあるが、中には一人で通う園生もいる。瀬谷区、緑区といった遠方から通う人もいるそうだ。工房では生活指導や木工、陶芸、織物、貴石加工、キャンドルづくりなどの作業を行っている。

鉄筋コンクリート二階建の工房の入口には、古本や陶器のワゴンが置かれ、通りか

かった人が思わず足を止める工夫がこらしている。入口でちよつとためらっていると、ガラス窓の向こうから「コーヒーでも飲んでいきませんか」と笑顔でマスターが手招き。一階玄関脇には、地域の人たちと園生との交流の場、喫茶コーナー「シャローム」が設けられており、園生に人気の喫茶実習が行われているのだ。

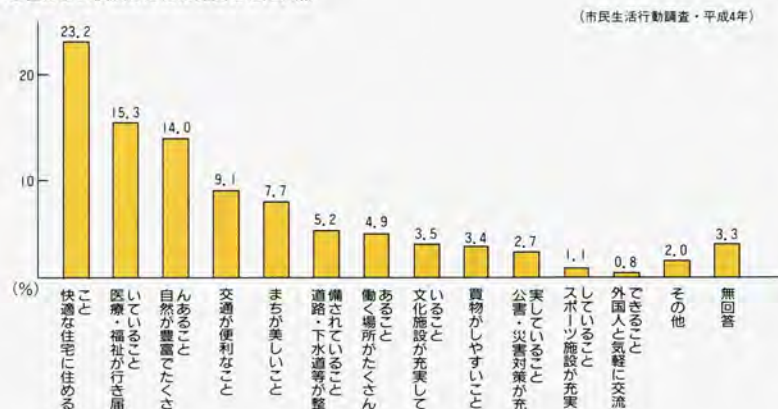
園生が交代でマスターやウェイターを務めるこの喫茶店、五、六人座ると満員になる小さなカウンター席で、だれでも自由にコーヒーなどを楽しむことができる。窓際には、作業の時間に製作した作品を展示・即売。美しく加工されたキャンドルやアクセサリーにひかれて、通りすがりの人が立ち寄る。小さな子どもの手を引いたお母さん、高校生のグループ、地区センターや図書館に来た人など、立ち飲み客の出る日もあるという人気ぶりだ。垣根のない施設をめざすこの工房ならではの風景である。お茶のお代は、お客の自由。

今月のマスター役は、照れ屋の池田君。少し緊張しながら注文したコーヒーを入れてくれる。ウェイトレスはしつかり者の鍛治さん。マスターを励ましながら、素早くパンフレットやボランティア募集のチラシなどを持ってきて、さりげなく工房のPR。

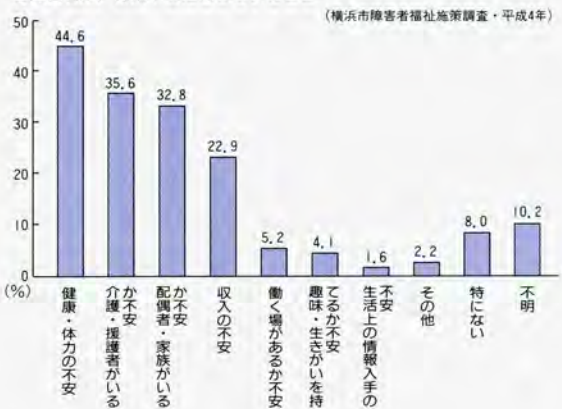
助け合いを助け合い

シャロームのようすを見に現れた指導員の方に、「作業室も見てくださいね」と勧められ、鍛治さんの案内で作業室の見学

●住みよい横浜のために充実させたい点



●障害者が、将来不安に感じていること



をさせていた。天井が高く、明るい作業室では、グループにわかれて木工や織物制作。さまざまな障害を持つ人たちが、それぞれの障害の程度に合わせてモノづくりを励んでいる。器用に道具をあつかっている人もいれば、指示されるのを待っている人、ぬいだ靴を前に考えこんでいる人と、行動もさまざま。そして、訪問者にはもう慣れているので誰も驚かない。「もうコーヒー飲んだ？」と、たえずかけられる声と笑顔。鍛冶さんには「シャローム頑張れよ」と仲間の励ましの声。みんながシャロームを気にしている。「園生はお客になっただけだった人と話をして、飲みものをサーブするのが楽しいですね。働いていること、他人のために少しでも役に立っている実感できることが、園生には大切なんです」と語る田村一男園長。シャロームは、だからみんなの宝ものなのだ。

福祉の現場では、職員はいつも日常の業務に忙しい。そこで、ボランティアは貴重なマンパワー。現在、オリブ工房には、月間延べ40人のボランティアが参加している。そのほとんどは、シャロームや地区センターに掲示されている「ボランティア募集」のポスターを見たり、口コミで知り応募してきた人。年齢も、高校生から高齢者までと幅広い。アメリカ、デンマークなど、外国人のボランティアが多いのも土地柄だろうか。

ボランティアでアクセサリー制作の指導をしている山田ナヲさんは「自宅近くでボランティアができることを知り、毎週こ

へ通っています。園生の中には驚くほど上達の早い人がいるし、出来ばえはタイコ判を押せますよ」と楽しそう。人間関係が苦手で高校を中退した子が、ここでボランティア活動に励もうち生きる目的を見出し、元気に福祉の道を歩みはじめたことも。共に生きる意味を学ぶ場として、オリブ工房の存在は地域に住む人々にとっても貴重なものになっている。

「市民生活行動調査」では「住みよい横浜のために充実させたい点」として、「医療・福祉が行き届いていること」が第二位（二五・三〇）にあげられている。住みよいまちとは、誰もが当たり前のよう暮らし、暮らせるまちではないだろうか。そのためには、障害を持つ人が暮らしやすく、ごく自然にまちの中に溶け込んでいけるようなまちづくりをすること、また地域の人々が共に支



喫茶コーナー「シャローム」は地域との交流の窓口。マスターの園生の表情もいきいきとしている

え合う心を持つことが何より必要であろう。ともあれ、「健やかで思いやりのかよう都市」実現のため横浜市がめざしているまちの姿のひとつが、本牧にはある。



オリブ工房では、地域を巻き込んで、新しい福祉施設のあり方をめざしている

第3章

ひととまちとのいい関係

ものの拠点は 人の拠点は

●瀬谷区
コンビニエンスストア三ツ境店

近頃巷で流行るもの

私たちが生活を維持していく上で、買い物は欠かすことのできない活動である。しかし、市民が食料品や日用品を手に入れるための場所と、高価なものを買ったりウィンドウショッピングを楽しんだりする、いわば買い物行動そのものを楽しむ場所は、大きく異なっている。

横浜市が平成三年に行った「消費者購買行動意識調査」によれば、食料品、身のまわりの日用品などの買い入れに、自分の住んでいる区内の身近な商店やスーパーマーケットを利用している市民はおよそ八割。一方、衣料品や家電製品などたまにしか買わないものは、横浜駅西口、東口など横浜の中心街へ出かけていく市民が約六割を占めている。中には、緑区なら東京都内、鶴

見区では川崎や都内へと出かけていく人もある。いずれも最寄りの私鉄やJRの延長線上にある、より近い商業集積地へ出かけるものと考えられ、買い物行動には二極分化と、そして足回りのよさ優先の傾向があることがうかがえる。

全体に、生協やスーパーマーケットは専業主婦が、ブティックは独身女性が、コンビニエンスストアは若者層がよく利用しているといえようか。ことにコンビニエンスストアの伸びは著しく、長時間営業でなくてもありのコンビニエンス（便利さ）が受けて、最近では主婦層の利用度も高い。コンビニエンスストアは、一九七四年に第一号店が誕生したが、急速に伸びたのは八〇年代の半ば。二十四時間営業を取り入れてから一気に拡大した。コンビニエンスストア（以下コンビニ）が他のスーパーや商店と違うのは、「コンビニ症候群」



いまや一つの文化となったコンビニ。豊富な品揃えと、いつでも手軽に利用できるのが特徴だ

といわれる一群のコンビニ大好き人間を生んでいること。現代のよろず屋の、何が人々をそんなに引きつけるのだろうか。

コンビニに見る「魅力ある店の条件」

「買いやすさ、選びやすさ、入りやすさ、コンビニの特徴です」と明快に規定するのは、横浜を拠点にコンビニ・ネットを広げているあるコンビニ企業のストア・カウセンセラー、安田明宏さん。コンビニ企業は、自社店のほか、たぐさんのフランチャイズ方式の販売店を傘下に納めている。そこで、それぞれの店の円滑な運営をバックアップするのが安田さんの仕事。地域の消費動向を分析したり、店の管理・運営についてアドバイスしたり、コンビニ経営者にとっては強力な助っ人である。スーパーでは缶ジュース一本は買いにく

いが、コンビニなら平気。スーパーは大量品揃えて勝負だが、コンビニは売れ筋しか置かない少量多種陳列なので、どこに何ががあるかすぐわかる。そして、ぶらっと入りやすく、何も買わなくても出て行きやすい。この辺りに、一日一回は足を運ばなければいけないというコンビニ症候群を生むカギがあるようだ。

コンビニでいつも気になるのが、立ち読みの群れ。コンビニエンスストア三ツ境店の店長、堀野雅人さんは「表から見るところで雑誌を読んでいる人がいると、店が繁盛しているように見えるし、店に入りやすい雰囲気がつくれるので、歓迎なんですよ」と笑う。演出効果と割り切る姿勢が客に圧迫感を与えず、出入りを容易にさせているようだ。店内に流れる音楽も、一人だけの客を緊張させないように、店内にざわつき感を出す工夫という。

堀野さんはまた、「壁まわり」というコンビニ独特の陳列方法を教えてくれた。入ってすぐの窓際に「はなやか効果」をあげるための雑誌を置き、お菓子、ドリンク類、弁当、パンと、壁際にそって並べる。これも客の動きを観察した結果の配置だそう。そして、徹底した市場調査と合理化によって、無駄のない商品陳列を図っている。

いまコンビニの主力商品は、FF商品といわれるファースト・フード類、つまりお弁当である。弁当の売上げがその店の生命を左右するといわれ、この店でも弁当には力を入れている。パブルがはじけ、いまは五百円以下の幕の内が人気ナンバーワン。

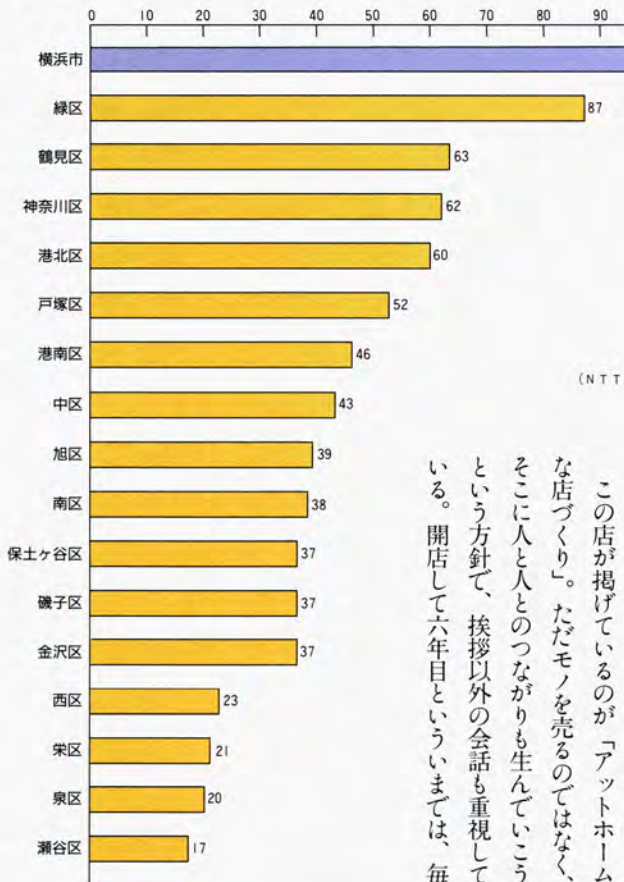
商売の基本にかえる

相鉄線三ツ境駅前にあるこの店の顧客は、ほとんどが近くの市営住宅に住む人か、通学途中の三つの高校の生徒たち。情報に敏感な高校生たちは、テレビCMで流されたものをすぐに欲しがり、口コミでどの店に置いてあるかを素早く伝え合うので、トレンドイ情報には気がぬけない。また、流行っているものを知る場所としてコンビニを利用する人も多いので、たえず新しいものを置くように心掛けていこう。

コンビニの一日の、最初のピークは午前

(NTTタウンページ・平成3年)

●コンビニエンス・ストア数



七時〜八時の出勤どき。新聞一部、ガム一個のサラリーマンで店はキヨスクに変身する。高校生たちは、FF商品にお菓子類。昼は主婦が、お弁当や他店で買った忘れ品を買っていく。夜のピークは五時過ぎから八時頃まで。駅前店のこは八時が最ピークだそう。共働きが増えているからか、夜はやはりお弁当の売れ行きが一番。二十代から三十代前半のサラリーマンとOLが多い。終電以降の午前一時から深夜帯。「深夜まで働いている人は結構多いんですよ(安田さん)」ということ、一晩中、客のときぎれることはない。友人たちとのおしゃべりや、誰よりも先に読むために深夜の雑誌納品を目当てにくる大学生、高校生も多く、掃除や品揃えなど夜中にしかできない仕事と重なって、「深夜のオアシス」はなかなか忙しいようである。

この店が掲げているのが「アットホームな店づくり」。ただモノを売るのはなく、そこに人と人とのつながりも生んでいこうという方針で、挨拶以外の会話も重視している。開店して六年目といういまでは、毎

日米のお客も増え、堀野さんたちとのおしゃべりを楽しんでいく人も少なくないそうだ。地元商店の顔を持ったコンビニの登場である。

「多様な品揃え、文化性、ぬくもり」を

魅力ある商店街の条件にあげる専門家の言葉にならば、コンビニに限らず、商店や商店街が、地域の人たちが気軽に立ち寄れる拠点性を持つことは、商売の基本ともいえるのかもしれない。



商店街は地域住民にとって欠かせない買い物の場所。活気ある商店街は、住民にとってなによりも頼もしい存在だ